

## ユングとフロイトにおける夢解釈の比較検討

名 島 潤 慈

### Jung's and Freud's Contributions to Dream Interpretation: A Comparative Study

Junji NAJIMA

(Received May 20, 1991)

According to Jung, Freud's view that dreams are the imaginary fulfillments of repressed wishes is hopelessly out of date. It is true of some dreams, not by any means of all. Dreams give expression to ineluctable truths, philosophical pronouncements, illusions, wild fantasies, memories, pains, anticipations, irrational experiences, even telepathic visions. For Jung, the dream is a symbolic expression of the unconscious, but it gives us insight into our subjective states. Unlike Freud, Jung interprets dreams as an aid to an individual's future final activities. Jung also emphasizes the dreamer's understanding of his dreams, and he declares that the analyst must be ready to evolve an entirely new theory of interpretation for every dream, thus stressing concentration upon the patient's dream images themselves rather than the content of the free associations. The images of each unique patient's dream stem from archetypes of the collective unconscious. In this paper, Jung's considerations on dreams are contrasted to Freud's.

**Key words :** Jung, Freud, dream interpretation, dream analysis

#### I 本稿のねらい

Sigmund Freud (1856-1939) が1900年に『夢解釈』(Freud, 1900) を出版して以来, 精神分析は今日まで多大な発展を遂げてきた(名島・鑑, 1990)。このような精神分析の流れの中で特記されるのは, Alfred Adler (1870-1937) と Carl Gustav Jung (1875-1961) の動向である。両者は共に, 最初は精神分析運動に参加していたものの, やがて Freud の学説に異議を唱え, それぞれ独自の人間科学を構築するに至った。すなわち, Adler は個人心理学 (Individual Psychology, Individualpsychologie), Jung はコンプレックス心理学 (Complex Psychology, Komplexe Psychologie) もしくは分析心理学 (Analytical Psychology, Analytische Psychologie) と称した。

Jung と Freud の接近・離別には夢が大きく関与している。Jung が初めてウィーンの Freud を訪問したのは1907年3月であるが (McGuire, ed., 1974), これは Freud の『夢解釈』を Jung が1903年に再び読んで, その中に述べられていた抑圧が Jung の観察結果と一致したからである (Jung, 1963:1989)。業績面でも, 「早発性痴呆症の心理」(Jung, 1907) は『夢解釈』の多大な影響下に書かれており, また, 1909年には「夢の分析」(Jung, 1909) と題する, Freud の考えを紹介するフランス語の論文を書いている。しかし, 「数字の夢の意義について」(Jung, 1910/1911) という論文がフロイト派の人々によって神秘的だと批判されたり, 1909年のアメリカ旅行の途中 (Jung, 1963:1989), (1) Freud が Jung に対して, Freud の見た夢についての連想をしゃべることを拒否した, (2) Jung の見た, 集内容的内容を持った夢の意味を Freud は理解できなかったといった出来事を

経て、Jung は次第に Freud から離れていく。

もともと、Jung と Freud の出会いには最初から一種の悲劇性が感じられる。先にも述べたように、Jung は1907年3月に初めて Freud を訪問している。二人は出会うやいなや延々と13時間も話しこんだという。いかに両者が互いに惚れ込みあったかがよく分かる。しかしながら、実はこの時の Jung の惚れ込みはけっして単純なものではなかった。Jung は後に、1907年11月2日づけの手紙を Freud に書いている。それによると、Jung は、ウィーンを訪問したさいに彼が見た Freud についての短い夢を Freud に話している。その夢は、Freud が異常なまでに弱々しい老人の姿に変わりはてて Jung の傍らを歩いているというものであった。この夢には後年の離別の萌芽が窺えよう。

本論文では、まず Jung の夢理論と夢解釈について整理し、ついで Jung と Freud の見解を比較検討したい。本論文で用いる用語について若干述べておくと、Jung も Freud も共に夢解釈 (dream interpretation, Traumdeutung) と夢分析 (dream analysis, Traumanalyse) という言葉を使用する。両者ともこの二つの言葉を特に使い分けてはいない。どちらかと言えば、Jung の場合には夢分析、Freud の場合には夢解釈を多用しているが、本論文では夢解釈に統一する。また、その内容を汲み取って普遍的無意識と訳されることが少なくない collective unconscious(kollektive Unbewußte) は集合的無意識、(解釈の) 主体的段階・客体的段階とも訳される subjective level・objective level (Subjektstufe・Objektstufe) はそれぞれ主観的段階・客観的段階、増幅や敷衍といった訳もある amplification(Amplifikation) は拡充、夢見者や夢見る人といった訳もある dreamer (Träumer) は夢主、その他、context(Kontext) はコンテクストないし文脈、personal unconscious(persönliche Unbewußte) は個人的無意識、self(Selbst) は自己、archetype(Archetypus) は元型、active imagination(aktive Imagination) は能動的想像、psyche(Psyche) は心、compensation(Kompensation) は補償、symbol(Symbol) は象徴、archaic(archaisch) は太古的という訳語を採用した。夢についての Jung の諸論文は、主として、Hull が英訳・編集した「Dreams」(R.F.C. Hull, ed., 1974. Princeton: Princeton University Press.) を使用した。なお、Freud の夢解釈の諸側面についての整理と検討は筆者が以前にまとめたものを使用した(名島, 1990)。

## II Jung の夢理論と夢解釈の特徴

### 1. 夢理論

夢についての Jung の考え方は表1にまとめた。Jung は、夢というものを心の自然な産物で、何の歪曲も施されていない、あるがままの心的事実だとみなす。また、夢は四つの相かなるドラマ的構造を有しているものと考え。そして、夢の主要な機能として、補償を強調する。補償は、夢主の意識的態度に欠けているものを文字通り補う働きであるが、別の見方をすれば、心的組織が自己統御によって平衡を回復しようとする試みでもある。これは、夢についての目的観点であるといってもよい。ただし、この場合、夢に対する治療者の態度が重要となろう。というのは、夢の持つ補償機能が効力を発揮するのは、夢の意味を合目的に把握しようとする治療者の側の努力が不可欠なるからである。このことは、夢の展望的機能についても同様である。なお、表2は Freud の考え方をまとめたものである。

表1 Jung による夢の特性

- (1) 無意識の内容を探究する方法として、言語連想法 (word-association method)、夢分析、能動的想像 (active imagination) の三つがある (1968)。能動的想像によってあらゆる材料が心の意識的な状態のうちに創り出されると、それは不確かな言語しか持たない夢よりもはるかに完成度の高いものとなり、夢よりもはるかに多くのものを内包する (1968)。
- (2) 夢というものはまさにそのあるがままの姿が本来の姿なのであって、それ以上のものでもなければそれ以下のものでもない (1917/1943)。夢は抑圧された願望のイメージの充足にすぎないという見方は、どうしようもないほど時代遅れである。夢は、避けることのできない真実、哲学的な意見表明、錯覚、荒々しい空想、思い出、計画、予知、不合理な経験、さらにはテレパシー的幻像 (telepathic visions) さえも含んでいよう (1931)。夢は、無意識の内容の象徴的な表現である。夢の作業全体は、本質的に主観的なものであり、夢というものは、夢主自身が舞台、役者、プロンプター、演出家、作者、観客、批評家である劇場である (1984b)。夢は自然の一部であり、騙そうという意図などまったく有していない。夢は、われわれがそれを出発点としなければならない事実なのである (1963)。夢は隠しごとをしない。つまり、夢は Freud が主張したような歪曲されたものではない。夢はすべてを含んでいる (1968)。
- (3) Adler が補償という概念を劣等感の相殺という意味に限っているのに対して、私は、補償という概念を機能間の相殺として、心的組織の自己制御として理解する (1921/1967)。夢の意味が意識の基本態度に一致する、もしくは意識の基本態度を裏付けるような夢は、比較的稀である (1944)。夢には心的組織の自己統御に関する補償的機能がある (1984b)。夢は意識の態度に対する補償である (1963)。夢とは、自己統御をする心的組織が示す自然な反応である。平衡を回復しようとする心的組織の試みである (1968)。
- (4) 夢の持つ展望的機能 (prospective function) と補償的機能 (compensatory function) とを区別したい。展望的機能とは、未来の意識の達成についての無意識における予想であり、予行練習ないしスケッチ、もしくは予め大雑把に描かれたプランのようなものである。その象徴的な内容は、葛藤の解決の略図であることもある。展望的機能は夢の本質的特徴であるが、しかしこの機能を過大評価しない方がよい (1948b)。意識の態度が適切な場合には、夢の意味は補償的機能のみに限定されよう。本人の意識の態度が客観的にも主観的にも不適応的であるという意味でその人が標準から逸脱している場合には、正常な条件下では補償するだけの無意識の機能は、以前のそれとはまったく異なる方向へと意識の態度を導くことのできるような指導的・展望的な機能となる (1948b)。
- (5) 夢には、引き下げの夢 (否定的補償の夢)、展望的な夢、単純な補償の夢、反応の夢、テレパシー夢などがある (1948b)。夢には、器質的障害を示す夢、コンプレックスが人格化された形で出現する夢、元型的イメージ (archetypal image) としての夢 (元型的な夢 archetypal dream) などがある (1968)。コンプレックスは個人的無意識の主要な構成要素であるが、コンプレックスの中には集合的無意識に属するものもある。例えば、集団心理としての救世主コンプレックス (saviour complex) は集合的無意識の元型的イメージである (1968)。
- (6) 数多くの平均的な夢はドラマ的構造を有している。それは、①呈示、②筋の発展、③最高頂ないし急転、④解決ないし結果、という四つの相から成る (1948a)。
- (7) 無意識は魔神のような怪物ではない。無意識という自然物よりも意識の方がより悪魔的であり、より倒錯している (1931)。無意識は個人的無意識と集合的無意識に分かれる。集合的な要素は、例えば彗星のように宇宙を飛ぶ夢、自分が地球や太陽や星になっている夢、異様に大きくなったり小人のように小さくなっている夢、見知らぬ土地にいて淋しかったり困ったり狂ってしまっている夢などの形で現れる。また、夢の中に神話や宗教のモチーフが用いられるのも集合的無意識の活動を示唆する (1928)。特に最高に発達した秘密の伝承の中に元型が現れている場合には、意識が判断し評価して手を加えた影響が必ず歴然と見られる。それに反して、夢や幻像の形で元型がわれわれに直接現れてくる場合には、それらは神話などに現れる場合よりもはるかに個性的で、理解しがたく、単純素朴である。そもそも元型という無意識的な内容は、それが意識化され、知覚化されると変えられてしまうものであり、しかもその内容をキャッチするそれぞれの個性的な意識による意味づけに従って変えられてしまうのである (1954)。元型は空想活動に特定の道を指し示し、そのため子供の夢の空想的イメージや分裂病の織りなす妄想の中に驚くほど神話と似たものを生み出すことになるし、はてはずっと小規模ではあるが、正常人や神経症患者の夢にも神話的なものが見られる。この場合、表象が遺伝するのではなく、表象を作り出す可能性が遺伝するのである。また、その遺伝は個別的なものではなく、元型が世界中に存在していることから分かるように、ほとんど万人に共通なものである (1954)。個人的無意識とは、意識化することのできるものすべてを含む心の領域であり、一方集合的無意識とは、意識化することのできない心の究極の核ともなる部分、つまり元型的な心の領域である。集合的無意識の層には神話的なパターンがあり、それが個人的なものに帰することのできない内容とか、夢を見る人の個人的な心理状態に反する内容さえ生み出す。神秘家とは、集合的無意識の過程に関して特に鮮明な体験を持つ人であり、神秘的な体験とは、元型の体験である (1968)。

- (8) 夢は心理療法における客観的な情報源となる(1968).
- (9) 神話的ないし集合的な夢(未開人が「大きい夢」と呼ぶもの)は、それを見た人が本能的に人に話さずにはいられないという特徴を持つ(1968)。「小さい」夢(“little” dream)(つまらない夢)は、主観的・個人的領域から生ずる幻想の断片で、その意味は、毎日の出来事に限定される。「小さい」夢は容易に忘れ去られる。一方、「大きい」夢(“big” dream)(意義深い夢)は、しばしば生涯にわたって記憶される。「大きい」夢は、人類の心の歴史の中で出くわすような象徴的イメージを含んでいる。「大きい」夢は時折3歳と5歳の間に生じるが、ほとんどの場合、人生の危機的な諸段階、つまり、初期青年期つまり思春期、中年期の開始時(36歳から40歳)、死が目に入る時に生じる。「大きい」夢に現れる元型の産物は、夢主の個人的経験ではなく、普遍的概念と関係している(1948a)。
- (10) 夢の中の道具は、意志を具体化するために人間が考え出したものを意味する。例えば、ナイフは切ろうとする意志であり、槍を使うには腕を伸ばすし、ライフルでは遠くのものに働きかけたり、影響を及ぼすことができる。望遠鏡では視野に関して同じことが言える。道具は、意志や知性、能力、巧妙さを表現するための手段である。夢の中の道具は同じような心理機制を象徴している(1968)。ヘビやカニといった動物のイメージで表される心的事実の表象は、器質的な事実をも表す。例えば、ヘビは脳脊髄組織、特に延髄や脊髄を表し、カニやカブトムシは腹部の交感神経や副交感神経を表す(1968)。
- (11) 自我とはさまざまな観念の複合体(complex)であり(自我を自我-コンプレックス ego-complex と呼ぶ)、意識野の中心をなし、高度の連続性と自己同一性を備えているように思われる。一方、自己は、経験的な概念であり、人間のあらゆる心的現象の総体を指す。これは、全人格の一体性と全体性を表す。心的全体性としての自己は、意識的な局面も無意識的な局面も持っている。経験的には自己は夢や神話やメルヘンの中に登場して、王・英雄・予言者・救世主といった上位人格の姿をとったり、円・四角形・円と四角の組み合わせ・十字架といった全体性シンボルの形をとる。自己は対立物の結合を表しており、その意味において例えば、陰と陽の協働としての道(Tao)・兄弟のペアー・英雄とその敵対者といった二者が合体したのものとしても姿を表す(1921/1967)。

表2 Freudによる夢の特性(名島, 1990)

- (1) 夢とは願望充足すなわち充足体験を求める一次過程である(Freud, 1986)。夢は、ある(抑圧され、排斥された)願望の(偽装した)充足である(Freud, 1990)。願望充足の本質は、ある好ましくない事柄を、その反対物によって置き換えるという点にある(Freud, 1990)。夢は様々な意味を含み持っている。例えばある一つの夢の中にいくつかの願望充足が含まれていたり、ある一つの願望充足が他のものを隠蔽していて、その衣をはいでいくと、一番下のところで非常に早い幼年時代の願望の充足実現にぶつかることもある(Freud, 1990)。夢はすべて極端に利己主義的である。すべての夢の中には、変装しているにせよ「可愛い」私が登場する。夢の中で満たされる願望は、通常この「自己」の願望である(Freud, 1990)。歪曲された夢の願望は、検閲によって退けられ禁じられた願望であり、このような願望の存在そのものが夢の歪曲の原因であり、夢の検閲が介入する動機となるものである(Freud, 1916-1917)。
- (2) 歪曲のない願望夢は子供の夢に多い。不快夢・不安夢・懲罰夢(不快夢の一種)も、願望充足である(Freud, 1900)。歪曲を受けず、小児の夢のように容易に願望の充足として見つめることができる一群の夢がある。それは、一生を通じて、至上命令とも言える力を持つ身体的欲求、すなわち飢え、渇き、性の欲求などによってひきおこされる夢、つまり身体的刺激に対する反応としての願望充足夢である(Freud, 1916-1917)。すべての夢は願望充足であり、一見そうでないかのようにみえる不安夢・懲罰夢(処罰の夢)も同様である。不安夢は、いわばむきだしの願望充足(好ましい願望の充足ではなく、いまわしい願望の充足)である。幼児型の夢を、許されうる願望の公然たる充足だと言えるとするれば、歪曲された普通の夢は、抑圧された願望の偽装した充足だと言える。不安夢は、抑圧された願望の公然たる充足である。という公式が成立する。不安は、抑圧された願望が検閲よりもっと強力なものであったということ、抑圧された願望が検閲に対抗して、その願望充足を貫き通した、あるいは貫き通そうとしつつあったことの表徴である。懲罰夢は、欲動の願望充足ではなく、批判し検閲し懲罰する法廷(超自我)の願望充足である(Freud, 1916-1917: 1933)。
- (3) ある意味で、すべての夢は便宜の夢(安逸の夢)である。夢は起きる代わりに眠り続けようという意図に奉仕する(Freud, 1900)。夢は眠りを妨げる(心的な)刺激を幻覚的な充足によって排除するものである(Freud, 1916-1917)。夢は常に睡眠を妨げるものを願望充足によって排除しようとする一つの試みである。つまり、夢は睡

- 眠の守護者である (Freud, 1940).
- (4) 夢の作業とは、潜在内容 (潜在思考) を顕在内容 (顕在夢) に代えることである。夢の作業の具体的な機制としては、①圧縮 (凝縮)、②移動 (置き換え)、③表現可能性への配慮 (夢の思考を視覚像に翻訳する作業)、④二次加工がある (Freud, 1900 : 1916-1917)。
- (5) 夢の中の情動について言えば、夢作業は、①夢思考の持ついろいろな情動をそのまま許容する、②情動を骨抜きにしてしまう (情動抑制)、③情動をその反対物に変えてしまう (情動逆転)、という三つのやり方で情動を取り扱う。①の場合は検閲が働いておらず、②と③の情動抑制・情動逆転は検閲の働きによる (Freud, 1900)。
- (6) すべての夢が性的解釈を要求するという主張は、私の「夢解釈」のどこにも記されていない (Freud, 1900[1919])。最広義の性的欲求以外の欲求を満足させるような夢がいくらかもある (空腹の夢、喉の渇きの夢、便宜の夢など) という明白な事実を私は見過ごすことはできない (Freud, 1900[1911])。精神分析は、夢はすべて性的な性質を持っていると主張している、という非難はあたらないものである。なぜなら、飢え・渇き・自由への渴望のようなはっきりした欲求の満足をテーマとした願望の夢があるし、不精な夢・焦慮の夢もある。しかし、ひどく歪められた夢は多くの場合、性的な願望を表現している (Freud, 1916-1917)。夢以外の領域における象徴表現は決して性の象徴表現だけではないのに、夢の中では象徴のほとんどすべてが性的な対象や関係を表現するのに利用されている (Freud, 1916-1917)。
- (7) 夢による未来予知といったことはほとんど考えられない。その代わり、夢は過去について教える。なぜなら、夢というものはあらゆる意味において過去に由来するものだからである (Freud, 1990)。いわゆる「テレパシー的な夢」について言えば、テレパシーは夢の本質とは何の関係もない。仮に純粋なテレパシー的な夢を見つかることがあつれば、それはむしろ睡眠状態におけるテレパシー的体験と名づけたい (Freud, 1916-1917 : 1922)。
- (8) 夢の形成の誘因には2種類ある。第一は、日常抑圧されている欲動の動き (無意識的願望) が、睡眠中、自我によって感知されるだけの強さを持つ場合、第二は、覚醒生活から引き継がれて残存している傾向、つまりあらゆる葛藤的な欲動を伴った前意識的思考過程が、睡眠中、無意識的要因による強化を受ける場合である。つまり、夢はエスからでも自我からでも起こる (Freud, 1940)。形成されつつあるすべての夢は、無意識の助けをかりて、夢がエスから発している場合には欲動の満足を、夢が覚醒生活における前意識的活動の残滓から発している場合には葛藤の解決・疑惑の排除・企図の実現を自我に要求する。しかし、眠っている自我は睡眠を維持しようという願望に集中していて、これらの要求を障害と感じ、この障害を追い払おうとする。自我は、一見譲歩のようにみえる行動をとることによって障害を追い払うことに成功する。つまり、自我は、このような状況のもとでは害にならない願望充足を要求に対立させて排除するのである (Freud, 1940)。
- (9) 外傷性神経症の夢は、患者を災害の場面に繰り返し引き戻すという性格もっていて、患者はそのたびに驚愕をあらたにして目覚める。患者は、いわば外傷に心理的に固着している。外傷性神経症の夢は、もはや願望充足という観点からみることではできないし、小児期の心的外傷の記憶をよみがえらせる精神分析を受けているさいに生ずる夢も同様である。これらの夢は、反復強迫に従うものである (Freud, 1920)。外傷性神経症の場合、夢はきまって不安の増大という結果に終わる。この場合には、夢の機能が停止している。夢は、ある特定の事情のもとではその意図をきわめて不完全にしか遂行できないか、あるいはまったく放棄してしまわざるをえない。何らかの外傷への無意識的な固着は、このような夢の機能の数ある障害の中では、その第一番目に位置している (Freud, 1933)。
- (10) 夢は、計画、警告、熟慮、準備、ある課題の解決の試みなどをすべて代表することもできれば、それらによって代理されることもできる。しかしながら、このことは、夢に変えられてしまった潜在思考についてだけあてはまる。夢はけっして単なる計画や警告ではなく、常にある無意識的願望の力をかりて計画や警告などが太古的な表現に翻訳され、これらの願望を充足するために姿を変えたものである (Freud, 1916-1917)。

## 2. 夢解釈

Jung および Jung 派では、患者に夢を記録してもらい、患者はその夢のコピーを分析家に差し出し、分析家の前でその夢を読む (例えば、樋口, 1978を参照)。長椅子はあまり使用されず、もっぱら対面法である。

Jung の夢解釈の技法と留意点は、表3にまとめた。表4は、Freud の考え方をまとめたものである。

Jung は夢の解釈にあたって「この夢は何を目的としているのか」という目的的な立場をとり、

表3 Jung の夢解釈の技法と留意点

- (1) 分析家が必要とする一切の材料は夢から獲得できるので、転移は特に必要ではない。転移についての作業を進めることは転移を最も刺激しやすく、分析に悪い結果をもたらす (1968)。
- (2) 初回夢はきわめて示唆に富むことが多い。新しい患者がやってきたら、「あなたは最近夢を見ましたか？ そうです、ね、昨日あたり？」といった質問をしてみる。もし夢を見たとすれば、その夢は、治療に対する患者の態度についてきわめて重要な情報を与えてくれる (1968)。
- (3) 分析家もし患者についての夢を見たら、その夢が自分の誤りを指摘しているかどうかをみきわめる (1968)。
- (4) まず最初は、どんな夢でも、夢のどんな部分でも未知であるという前提に立ち、コンテキストを知った後で初めて解釈を試みる。夢内容の心理学的コンテキストを成しているのは、夢の表現がごく自然な形で織り込まれている連想の織物である (1944)。
- (5) どのような解釈も仮説であり、未知のテキストを読もうとする試みにすぎない。単独夢の解釈は重視しない。夢解釈の確実さが増すのは、夢のシリーズ (系列) においてのみである。この場合、次に見る夢が前の夢について行った解釈の間違いを訂正してくれる。一連の夢のシリーズにおいてはまた、基本的なアイデアやモチーフをはるかによく認識できる。だから、患者たちに対して、自分が見た夢と与えられた解釈を丹念に記録するよう強く勧める。もう少し先の段階では、患者たちに、自分たちの見た夢の解釈もやらせる。こうすれば、患者は、医師の手助けなしに自分の無意識を正しく取り扱うやり方を学べる (1931)。たった一つしかない単独夢の場合には自分勝手な解釈になりがちなので、夢はできるだけシリーズで見えていく (1968)。
- (6) 夢の個々の文脈について注意深く検討せずに解釈を行うのは危険である。どのような理論をもけっしてあてはめずに、ただその夢について患者がどのように感じるのかをいつも患者に尋ねるようにする。ただし、神話的な夢は例外である (1968)。夢が個人的な材料から形成されている場合には夢主の個人的な連想を聞かなければならないが、夢が神話的な構造を持っている時にはその夢は万人共通の言葉で語られているので、必要な知識を持っていれば誰でも夢の文脈の構成に必要な相似性を提供することができる (1968)。集合的無意識の層には神話的なパターンがあり、それが個人的なものに帰することのできない内容とか、夢主の個人的な心理状態に反する内容さえ生み出す。夢分析では神話の資料の中に入り込まざるをえない (1968)。
- (7) 夢の意味を理解するには、できるだけ夢のイメージに密着する。例えば、誰かが「樅の木でできたテーブル」の夢を見たとする。その場合、夢主がそのテーブルについて何も思いつかない場合にはもとの夢イメージに帰って、「樅の木でできたテーブルという言葉が何を意味しているのか、私には何も分からないと思って下さい。それがどういった物なのか、私によく分かるようなやり方で、説明してみてください」と患者に言う。このようにすれば、この夢イメージの全体的なコンテキストがほぼ手に入る。この夢の中のすべてのイメージについてこのような作業を行った時、夢解釈という冒険の準備が整うことになる (1931)。
- (8) 主観的段階での解釈は総合的ないし構成的解釈であり、客観的段階での解釈は分析的 (因果的・還元的) 解釈である。集合的無意識のイメージないし象徴は、総合的に取り扱われて初めてその価値を発揮する (1917/1943)。構成的とは「組み立てる」という意味である。構成的方法は無意識の産物の再構成に関わる。構成的方法は無意識の産物、すなわち象徴的表現から出発するが、この象徴的表現は心的発達の一部を予め把握して表している。Maederはこの点について、無意識は本来展望的な機能を持つ、すなわち無意識は見たところ戯れているようだが、未来の心的発達を先取りしていると論じている。Adlerもまた、無意識には予め把握する働きがあると認めている。夢の展望的機能を主として「願望」だけに限っている Freud ですら、夢に対して少なくとも「眠りの番人」としての目的的な役割を与えている。われわれは無意識の産物を、ある目標や目的を指し示す表現であるが、ただしそれが目指すものの特徴を象徴的言語によって示す表現である、と理解する。構成的な解釈法とは、無意識の産物の根底にある源泉ないし原素材を対象とするのではなく、象徴的な産物を誰にでも理解できるように表現しようとするものである。それゆえ、無意識の産物に対する自由な思いつきは、いかなる目標に向かっているかという視点から考察されるのであって、どこから生まれてきたかという視点から考察されるのではない。自由な思いつきは、将来行動するか止めるかという視点から考察されるのである (1921/1967)。Freud の夢理解はもっぱら客観的段階でなされている。つまり夢の願望が現実の客体と関連づけて解釈されたり、あるいは生理的領域、つまり心理外の領域に属する性的事象に結びつけられている (1921/1967)。還元的とは「遡る」という意味である。私はこの表現を、無意識の産物を象徴的な表現とみなすのではなく、記号、すなわち奥底にあるものの印ないし徴候と理解する心理学的解釈法を呼ぶために用いる。したがって還元的方法が無意識の産物を扱うやり方は要素や根本的な事柄に遡るというやり方であるが、この場合、その要素や根本的な事柄は実際に起こった出来事の記憶であっても、心を刺激する基本的な事柄であってもよい。Freud の解釈も Adler の解釈も還元的である。というのは、両者とも最終的には幼児的ないし生理的な性格を持つ、要素的な願望や衝動という事柄に還元するからである (1921/1967)。夢の解釈には、主観的段階での解釈と客観的段階での解釈がある。主観的段階での解釈は、夢の中のすべての人物を、夢主自身のパーソナリティのさまざまな特徴が人

格化されたものとみなすものである。重大な利害関係で結ばれている人の夢を見たとなれば、客観的段階での解釈の方がより真実に近くなる。しかし、現実には重要でない人の夢を見たとなれば、主観的段階での解釈の方が真実に近くなる (1948 b)。

- (9) Freud の因果的観点からの解釈に対して、目的的观点からの解釈を用いる。目的的观点から夢を考えるとというのは、夢の原因を否定することではない。そうではなくて、ある特定の夢の周囲に集まっている連想素材の別の解釈である。素材の事実は同一であるが、それを判定する基準が違うのである。簡単に言えば、「この夢の目的は何なのか？この夢はどのような効果をひきおこそうとしているのか？」といった問いかけをする。心(プシケ)は因果的な観点だけでなく、目的的な見方をも要求する。二つの観点が組み合わされて初めて、夢の性質をより完全に理解できる (1948 b)。目的的观点 (standpoint of finality) からすれば、夢の中の象徴的表現の画一性ではなくて、象徴的表現の多様性に意味がある。因果的な見方 (causal point of view) はその性質上、意味の一義性を、つまり象徴の意義の固定化をめざす (1948 b)。
- (10) 夢を判読する場合、例えば文献学者がサンスクリットの原文や楔形文字を判読する時のやり方、つまり拡充を用いる。Freud は、自由連想と、「原初形態への還元 *reductio in primam figuram*」と呼ばれる原則を用いた (1968)。自由連想という方法は非常に疑わしいものである。自由連想は、連想のいかなる量にも、またいかなる種類に対しても自分自身を開くことを意味し、これらの連想が当然コンプレックスへと導く。しかし、私が知りたいのは夢がコンプレックスに対して何を言おうとしているのかということであって、何がコンプレックスかを知りたいのではない。私は人間の無意識がコンプレックスに関して何をしているのかが知りたい。つまり、自分自身のために何をしようとしているのかが知りたい (1968)。
- (11) 夢やその他の無意識の現れをできるかぎり理解し、粗末にしないようにする。それは、一方では時が経つにつれて危険なものになっていく無意識の反論を妨害し、他方では、補償というありがたい要因をできるだけ利用するためである (1917/1943)。補償とは機能間の相殺、心的組織の自己制御である。無意識の活動は、意識機能によって生じる構え全体の偏りを相殺する。普通は無意識による補償は対立的なものではなく、意識の方向づけを相殺したり補ったりする。例えば、夢の中で無意識は、意識の状況に対して布置されながら意識の選択によって抑圧されている内容をすべて示しているのであり、意識が十分に適応するためにはこれらの内容を知ることが不可欠であろう (1921/1967)。正常な状態では補償は無意識的である。すなわち、意識の活動を無意識的に制御する働きをしている。神経症においては、無意識が意識と激しく対立するため、補償が損なわれる。したがって分析的治療は、無意識内容の意識化を目的とし、その方法によって補償を回復させようとする (1921/1967)。
- (12) 治療において主導権を握るのは患者の無意識である。治療が正しく進行していくと、それは夢に反映してくる。正しい場合には進歩を物語る夢が見られる。そうでない場合には無意識の側から修正がなされる。この場合肝腎なのは、夢の正しい判読である。判読が間違っていたり不完全だったりすると、例えば、前の夢のあるテーマが次の夢でもう一度もっと明瞭な形で繰り返されたり、医師の解釈が患者の小馬鹿にしたような注解でまったく無価値なものにされてしまったり、あるいはそれに対する激しい反論が患者から直接なされたりする。どの解釈も的はずれな場合には、治療の粗雑化や不毛、無意味さが生じる (1917/1943)。
- (13) 元型的な像が夢に現れる場合、特にそれが分析の終わりの段階に現れる時、患者に対していつも、あなたの問題は特殊でも個人的なものでもなく、あなたの心理状態は普遍性を持った人間的なレベルに近づいていると説明する (1968)。精神的苦悩はいわゆる正常な人と呼ばれる人たちの間に常に隔たりを作り出すが、葛藤をその人の個人的な失敗のせいとせず、人間すべての共通の苦悩で、時代すべてが背負っている問題であると了解するのはきわめて重要なことである。この一般的見解が自分自身のうちから個を取り除き、人間性と結びつける (1968)。

表 4 Freud の夢解釈の技法と留意点 (名島, 1990)

- (1) ある一つの夢の全体ではなく、夢の内容の個々の部分部分 (各要素) について、それぞれ患者の連想 (思いつき) を問う (Freud, 1990)。夢というものは、夢を見た人がそれについての情報をくれないかぎり理解できないものである (Freud, 1916-1917)。夢主に対して、顕在夢の印象にとらわれることなく、注意を夢の内容の全体に向けず、個々の部分に向け、これらの部分の一つ一つについて思いついたことを、つまりそれらの部分部分を他の部分から切り離して眺めた場合にどんな連想が浮かぶかを報告するよう要求する。どのような順序で夢主に、夢の各部分に手をつけさせていけばよいのかという点については、①夢が物語られたさいに明らかになった時間的な順序に従う、②夢

- の中にあらわれた昼のなごりをまず探し出すようにと夢主に指示する、③夢内容の諸要素の中でも特に明確さと感覚的な強さという点で目立つような要素から始めるように命じる、などのやり方がある。いずれを選んで連想に近づこうとも、そこには何の差異もない (Freud, 1933)。夢主の連想が明らかにする連鎖は、顕在夢と潜在内容との間の間隙に関連性を挿入し、その助けをかりて夢の潜在内容を再現し、夢を解釈することができる (Freud, 1940)。
- (2) 夢は無意識的なものの歪曲された代理物であり、夢解釈の課題はこの無意識的なものを発見することにある。夢解釈をする時には、三つの重要な原則がある。第一は、夢が一見持っているようにみえる意味は無視してしまう。第二は、夢の解釈の仕事は、それぞれの要素に対する代理表象を呼び起こすことだけにとどめ、その代理表象について熟考したり、何か適切なものを含んでいないかなどと吟味したりせず、また、それらの表象がいかに夢の要素からかけ離れていても気にしない。第三は、隠れた、無意識的なものが自分から姿を見せるまではじっと待つ (Freud, 1916-1917)。
- (3) (夢の自己分析を行う場合) どんな夢の中にも前の日の諸体験への結びつきが見出されるので、夢を見るきっかけとなった前日の事件なり体験なりをまず探してみるから夢分析を開始できる (Freud, 1900)。 (夢の自己分析を行う場合) 種々の連想の連鎖を辿っていくと、自分の作業能力が尽きてしまったと感じる場合も稀ではない。そういう時はいったん中止して、翌日再び仕事にとりかかるべきである。すると、夢内容の別の一部が注意をひき、夢思考の新しい層への入口が見つかる。これは、分画的夢解釈と名付けられる (Freud, 1900)。
- (4) ある夢の報告が最初分かりにくい場合には、患者にその夢の報告をもう一度繰り返させる。この二度目の報告が最初の報告と同じ文句で行われることはまずない。この二度目の報告にさいして文句の変更された箇所は夢の偽装の成功しなかった箇所なので、そこから夢解釈を開始するとよい (Freud, 1900)。
- (5) 夢解釈はもっぱら夢の各要素についての自由連想を吟味することによってなされるが、夢の中に象徴的表現が使用されている場合には、患者はいつものようにいろいろなことを思いつかない。この場合には、夢象徴についての知識を用いた象徴的夢解釈を行う (Freud, 1900)。夢解釈に対する象徴の意義を過大に見積もるべきではない。夢を見た本人の自由連想到こそ決定的な意義を認めようとする技術に優先権があり、象徴翻訳の技術は補助手段である (Freud, 1900[1909])。夢象徴は、典型夢(類型夢)や、ある個人に繰り返し現れる夢を解釈する場合に不可欠なものである (Freud, 1901)。われわれは夢の象徴の意味を、いろいろな源泉、すなわち童話、神話、冗談やウィット、民族学、一般俗語などから知る。夢の中では、象徴のほとんどすべてが、性的な対象や関係を表現するのに利用される。われわれは、正しい象徴と性的なものとの間には特に密接な関係が成立しているという推測を固持してさえすべし。象徴表現は、夢の検閲とならんで、夢の歪曲をつくる第二の孤立した契機である (Freud, 1916-1917)。無意識は、性的コンプレックスを表現するためにある種の象徴を用いる (Freud, 1910)。
- (6) ある夢に与えた解釈が、それに続いて見られた別の夢によってたしかめられ、かつ解釈の続行が可能になることも多い。数週間あるいは数カ月にわたって見られた夢の全系列が共通の地盤の上に立っていて、互いの間に連絡を保たせつつ解釈されうる場合もある。一夜のうちに見られたいくつかの夢は、おしなべて一つの全体として取り扱われるべきである (Freud, 1900)。一夜のうちに見るいくつかの夢はすべて、その内容上からは、一つの夢とみなすべきである。夢がいくつかの部分に分かれ、その中のグループやその部分の数など、そういうことにはすべてしかるべき意味があり、潜在的夢思考の本音の一部がそこに出ているとみるべきである。いくつかの主要部分から成り立っている夢や、一夜のうちに見た別々の夢を解釈するにさいして忘れてならないことは、これら種々の前後関係のうちに見られた夢は同一の事柄を語っているのであり、同一の心の動きを別々の材料によって表現しようということである。これら同一の夢の中での、時間的に先立つ夢は、そのあとで見られる夢よりもより歪曲された控え目な夢であり、あとの夢はより大胆な、さらに明瞭な夢であることが多い (Freud, 1900)。
- (7) 夢の忘却はその大部分が抵抗の仕業である。夢分析の最中に、それまでは忘れたといわれていた一脱落部分が突然思い出されるということがよくある。この部分こそ、きまって一番重要な部分である (Freud, 1900)。
- (8) ある一つの夢についての患者の連想が非常に長かったり、漠然としていて、その日の分析時間内では、その夢についての解釈を最後まですすることができないことがある。また、患者が非常に多くの夢を報告するにもかかわらず、その夢の意味についての患者の理解は遅々として進まないこともある。患者がこのようにふんだんに材料を提供するという連想態度は、一種の抵抗表現であり、下手をすると肝腎の治療の方はすっかり現実離れしてしまう。分析医は、どんな時でも患者の心に浮かんできたことをまず取り上げるという技法原則を銘記すべきである。そして、いつも一回の分析時間に限られた解釈の結果で満足すること、また、夢の内容を完全に認識しえなかったことを損失と思わないことである。ある一つの夢を生んだ願望の動きは、それがどんなものであろうといまだ理解されきらず、無意識の支配に拘束されている限り、また別の夢となって回帰してくる。分析医が一つの夢の解釈に完璧を期する最善の道は、むしろその夢を捨てて、その夢と同じ材料をもっと理解しやすい形で再び取り上げている新しい夢に取りかかることにある (Freud, 1911)。
- (9) 幼児型の夢(4, 5歳までの小児がみる夢や、ある種の条件のもとで成人が見る夢)では夢の歪曲はなく、顕在夢



と潜在思考は一致しており、したがって夢解釈の必要はない。ただし、小児の夢（幼児型）を理解するためには、小児の生活を参考にしなければならない。小児の夢は、残念な気持ち、憧れ、満たされない願望などをあとに残すような日中の体験に対する反応である（Freud, 1916-1917）。

- (10) 精神分析医が被分析者に対して、見た夢はどんなものでも目覚めた直後に文章にして書き留めておくようにという課題を与えるのは、分析治療においてはまったくよけいなことである（Freud, 1911）。夢を見た人が、その夢を忘れてしまわないように目が覚めてすぐに見た夢を文字に書き留めるという場合、われわれはそういう人に対して、そんなことをしても無駄だと言ってやる。と言うのは、本人が抵抗にうちかって夢の本文の保存に成功しても、その場合、抵抗は今度は連想の方に移ってしまって、顕在夢の解釈を困難にするからである。このような状況のもとでは、抵抗が次第に増大して行って連想を全面的におさえつけてしまい、それによって夢の解釈が一頓挫をきたしたとしても、これは異とするには足りない（Freud, 1933）。
- (11) 逆転・反対物への転化は、夢作業が最も愛好する、最も利用度の高い表現手段の一つである。ある夢の意味がどうしても分からない場合には、その夢の顕在内容の特定の部分をためしに逆にしてみるといい。そうすると、一挙に解決のつくことがよくある（Freud, 1900）。
- (12) 古代語や古代文学は意志の伝達をその使命としている。しかし夢は、けっして誰かに何かを語ろうとするものではない。夢は伝達道具ではなく、もともと理解されないことを狙っている。だから、夢には多義性や不確定性が多くて、その意味を決定することができないということが明らかになっても、別段驚いたり困惑したりする必要はない。夢がどこまで理解できるものであるかは、ただ訓練と経験とを積むことによって確かめるほかはない（Freud, 1916-1917）。

Freud の言う夢の構成要素についての「自由連想」ではなくて夢主の個人的連想を元にした拡充法を用い、そして主観的段階での解釈を重視する。（夢主自身の個人的連想が得られず、したがって通常の拡充が不可能な象徴夢の場合には元型的拡充を用いる。元型的拡充を行うためには、神話や歴史、古文書などについての治療者側の知識が必要である。元型的拡充は、夢主の情報に基づかない治療者側のみの積極的な再構成である。それだけに、元型的拡充による解釈の妥当性が問題となろう。）ちなみに、Jung の後継者である Meier(1972) は、Jung 派の立場から夢を綿密に処理するために、次のような図式を提案している。それらは、(1)夢のテキスト、できれば前もってドラマ的図式に合わせて整理して、(2)それに属する意識的経験、(3)主観的コンテキストの連想、(4)場合によれば、神話的パラレル、(5)場合によれば、分析家の連想、(6)場合によれば、第三者の客観的情報の報告、(7)結果として生じる夢の意味の説明、という七つの項目である。

### Ⅲ Jung と Freud の対比

これまでのところで夢についての Jung の考えと夢解釈について述べた。Jung の見解を Freud のそれと比較してみると、表5のようになる。この表は、前出の表1と表3（Jung の見解）、表2と表4（Freud の見解）をそれぞれ比較検討したものである。表5を見ると、夢のとらえ方、解釈の前段階（準備）、解釈のやり方、象徴夢・予知夢・テレパシー夢などについて、Jung と Freud の見解はそれぞれ対立しあっているのがよく分かる。ただし、二人の間に共通点がまったくない訳ではない。そこでこれまでの資料から二人の共通点を選択し、列挙したのが表6である。無意識を探究する素材としての夢、シリーズとしての夢の意義、夢主が提供してくれる情報の重視、象徴的夢解釈の重視などが主要な共通点である。もっとも、共通点といってもそれはごくおおまかなもので、共通点の中身となると、表6の中に注記しておいたように両者は細部において異なってくる。

表5 夢に関する Jung と Freud の対比

Jung	Freud
無意識の探究法として、言語連想法・夢分析・能動的想像がある。	無意識の探究法として、自由連想法・夢解釈・失錯行為の分析がある。
夢はそのあるがままの姿が本来の姿であり、歪曲はなく、願望充足以外に補償的機能を有する（夢主が標準から逸脱している場合には、展望的機能が働く）。	夢は、ある(抑圧され・排斥された)願望の(偽装した)充足であり、(幼児型の夢以外は)検閲によって歪曲されている。
予め患者に夢を記録してもらい、面接の場に持参してもらう。	患者が自分の見た夢を記録するのは余計なことである。
解釈の前段階として、文献学者が未知の文献を判読する時のやり方、つまり拡充を行う。	解釈の前段階として、夢の各構成要素についての自由連想を行う。
目的的观点からの解釈(未来志向的)を行う。	因果的觀點からの解釈(過去志向的)を行う。
もっぱら主観的段階でなされる総合的・構成的解釈を行う(ただし、客観的段階での解釈も重要)。	もっぱら客観的段階でなされる分析的・還元的解釈を行う。
象徴夢は、神話的・宗教的・歴史的特徴を有する。	象徴夢は、もっぱら性的特徴を有する。
予知夢やテレパシー夢は存在する。	夢による未来予知は考えられないし、テレパシーは夢とは無関係である(睡眠状態におけるテレパシー体験ならありうる)。

表6 夢に関する Jung と Freud の共通点

- (1) 夢は無意識を探究するための王道であり、重要な素材である。[ただし、Jung から見れば Freud の無意識は個人的無意識の領域にとどまり、Jung の無意識は個人的無意識と集合的無意識という二つの領域を含む。また、無意識を探究する手段としては、Freud にあっては夢解釈と並んで寝椅子による自由連想(出発点のない非指示的な自由連想)が強調され、Jung にあっては、後年、夢よりもむしろ能動的想像の方が強調された。]
- (2) 一つ一つの孤立した単独夢よりも、シリーズとしての夢が重視される。つまり、夢を系列的に見ていくことが重視される。夢を系列的に見ていくと、同一の心の動きをつかめるし(Freud)、また無意識の流れ具合をつかみやすい(Jung)。さらには、治療者の解釈の妥当性も確認しやすい(Freud・Jung)。
- (3) 夢解釈には夢主が提供してくれる情報が必要である。[象徴夢の場合にはこのことはあてはまらない。]
- (4) 夢の構成要素についての夢主の連想や思いつきが出てこない時、象徴的夢解釈が大事となる。つまり、夢の中の特定の「象徴」(象徴的イメージ)についての治療者側の知識や学殖が不可欠となる。[ただし、Freud にあっては象徴はもっぱら性的な関係や欲望、性的コンプレックスなどに結びつけられ、Jung にあっては象徴は神的・神託的・宗教的・創造的なものに結びつけられる。なお、Jung から見れば、Freud の言う象徴は記号に近いものである。]

#### IV まとめ

本論文では主として Jung の夢解釈の諸側面について Jung の考えを展望的に整理し、あわせて Freud の夢解釈と対比させた。全体的にみると、Jung の夢解釈は、Freud をいわば反面教師とした形で構成されている。以前に述べたように(名島, 1990)、Freud の夢解釈の特徴は、患者による夢の記録づけの拒否、夢(顕在夢)と潜在思考(潜在内容)との峻別、(歪曲された夢における)顕在夢の軽視と潜在思考の重視、夢作業と逆方向を辿る夢解釈の手続き、解釈の媒介物としての指示的・制限的自由連想の強調(治療構造は寝椅子)、夢の機能としての願望充足への固執(外傷性神経

症の夢は例外), 夢の利己性と過去性の強調(結果的に前者からは夢の他者伝達性が否定され, 後者からは夢の未来志向性・予知性が否定される), (例外はあるにせよ) 患者の夢の背後に潜む性的願望の強調, 性的コンプレックスに焦点をあてた象徴的夢解釈, テレパシー夢や予知夢の否定などである。これに対して, Jung の夢解釈の特徴は, 患者による夢の記録づけの推奨, 夢という視覚的イメージそのものの重視(夢における歪曲の否定), (Freud の言う夢の願望充足機能よりも) 平衡を回復するための補償機能・展望的機能・予知的機能の強調, (Freud の因果的観点からの解釈よりも) 目的的观点からの解釈の重視, (Freud の「原初形態への還元」に基づく自由連想よりも) 拡充の強調(治療構造は対面法), (Freud の分析的・還元的解釈よりも) 総合的・構成的解釈の強調, 夢の他者伝達性の強調(より正確に言えば, 夢を夢主へのある警告ないし告知と受け取ろうとする解釈者の態度の強調)などである。もちろん, これら以外に, 元型夢, つまり集合的無意識内に存在する元型的イメージとしての夢や, 平均的な夢における夢のドラマ的構造(四つの相), 患者について治療者が見る夢の意義(逆転移データとしての夢, 患者に対する治療者の意識の態度の補償としての夢)など, Freud には見られないものも多い。ただし, (1) (後年の Jung は夢よりも能動的想像の方をより強調するようになったが) 夢というものが無意識を探究するための重要な素材となること, (2) 個々の単独夢よりもシリーズ(系列)としての夢が重要であること(夢を系列的に見ていくこと), (3) 夢主の側の情報が大切であること, (4) (性的なものと宗教的なものという違いはあるにせよ) 象徴的夢解釈が大事であることなどは Jung と Freud の夢解釈における数少ない共通点として挙げられよう。

## 引用文献

- Freud, S. (1900): *The Interpretation of Dreams*. Standard Edition, 4-5.
- 樋口和彦 (1978) : 夢分析 (河合隼雄・樋口和彦編, 現代のエスプリ No.134 ユング心理学, 至文堂, 94-95)
- Jung, C. G. (1907): *Über die Psychologie der Dementia Praecox. Ein Versuch*. (安田一郎訳, 1979, 分裂病の心理, 青土社)
- Jung, C. G. (1909): The analysis of dreams. Translated by R. F. C. Hull from "L'Analyse des rêves." In R. F. C. Hull(ed.), 1974, *Dreams*. Princeton: Princeton University Press. 3-12.
- Jung, C. G. (1910/1911): On the significance of number dreams. Translated by R. F. C. Hull from "Ein Beitrag zur Kenntnis des Zahlentraumes." In R. F. C. Hull(ed.), 1974, *Dreams*. Princeton: Princeton University Press. 13-20.
- Jung, C. G. (1917/1943): *Über die Psychologie des Unbewußten*. Zürich: Rascher Verlag. (高橋義孝訳, 1977, 無意識の心理, 人文書院)
- Jung, C. G. (1921/1967): *Psychologische Typen*. Zürich: Rascher Verlag. (林道義訳, 1987, タイプ論, みすず書房)
- Jung, C. G. (1928): *Die Beziehungen zwischen dem Ich und dem Unbewußten*. Zürich: Rascher Verlag. (野田倬訳, 1982, 自我と無意識との関係, 人文書院)
- Jung, C. G. (1931): The practical use of dream-analysis. Translated by R. F. C. Hull from "Die praktische Verwendbarkeit der Traumanalyse." In R. F. C. Hull(ed.), 1974, *Dreams*. Princeton: Princeton University Press. 87-109.
- Jung, C. G. (1944): *Psychologie und Alchemie*. Zürich: Rascher Verlag. (池田紘一・鎌田道生訳, 1976, 心理学と錬金術 I・II, 人文書院)
- Jung, C. G. (1948a): On the nature of dreams. Translated by R. F. C. Hull from "Vom Wesen der Traume." In R. F. C. Hull(ed.), 1974, *Dreams*. Princeton: Princeton University Press. 67-83.

- Jung, C. G. (1948b): General aspects of dream psychology. Translated by R. F. C. Hull from "Allgemeine Gesichtspunkte zur Psychologie des Traumes." In R. F. C. Hull(ed.), 1974, *Dreams*. Princeton: Princeton University Press. 23-66.
- Jung, C. G. (1954): *Von den Wurzeln des Bewußtseins*. Zürich: Rascher Verlag. (林道義訳, 1982, 元型論, 紀伊國屋書店)
- Jung, C. G. (1963): *Memories, Dreams, Reflections*. New York: Pantheon Books. (河合隼雄・藤縄昭・出井淑子訳, 1972・1973, ユング自伝1・2, みすず書房)
- Jung, C. G. (1968): *Analytical Psychology: Its theory and practice. The Tavistock Lectures 1935*. London: Routledge & Kegan Paul Ltd. (小川捷之訳, 1976, 分析心理学, みすず書房)
- Jung, C. G. (1989): *Analytical Psychology: Notes of the seminar given in 1925 by C. G. Jung*. Princeton: Princeton University Press.
- McGuire, W. ed.(1974): *The Freud/Jung Letters. The correspondence between Sigmund Freud and Carl Gustav Jung*. London: Hogarth Press. (平田武靖訳, 1979・1987, フロイト/ユング往復書簡集 上・下, 誠信書房)
- Meier, C. A. (1972): *Die Bedeutung der Traumes*. Walter Verlag. (河合俊雄訳, 1989, 夢の意味, 創元社)
- 名島潤慈 (1990) :フロイトの夢解釈についての検討 熊本大学教育学部紀要, 人文科学, 第39号, 271-283
- 名島潤慈・鎌幹一郎 (1990) :精神分析学(小此木啓吾・成瀬悟策・福島章編, 臨床心理学大系第7巻 心理療法1, 金子書房, 66-91)